

チェコ人と音楽

出井 則太郎

声楽家

四回のシリーズで連載したチェコの音楽事情も最終回。
今一度、私の体験したチェコと音楽の魅力をたっぷりお伝えしたい。

チェコでの生活と音楽

ある夏の日の、野外ライブのクライマックス。満天の星空の下で、数百人の聴衆と肩を組んで歌を歌った。チェコの夜空に、星に負けないぐらい素敵な歌声が響いていた。

別の日の小旅行。田舎を走る単線・一両列車の車内で、旅人のギター伴奏に合わせて乗客みんな

歌った。車掌も歌っていたため、止まる駅を止まらず通過。降りるはずだった人も、車掌の肩を叩きながら笑って歌い続ける。

立ち寄った飲み屋で、歌っている酔っ払いの輪に混ぜてもらって一緒に歌い、「おまえがどっから来たか知らないが、関係ない！友達だ！」と言われ、生バンドのいる居酒屋では、正確には「振り回されていた」と表現するしか方法がないダンスを踊ったり、電車のコンパートメントで、童話に出てきそうなお爺さまから呪文のような古い古い歌を習ったりと、チェコ生活は素敵な歌に満ちていた。知り合いの村長は、月に一回、

村祭りを開くのが仕事だった。月に一度の村祭りは消防署の駐車場を貸し切って行われる。ミュージシャンを呼んで、生演奏で子供も大人も歌い踊る。地元のホテルに、自家製の蒸留酒。お酒を飲めない子供はオレンジジュースで乾杯の真似をする。しかしどんなに楽しくても場所が消防署なのは気が引ける。「今日、村で火事が起きたらどうするの？」と聞くと「大丈夫だ。そういう時は隣の消防署に頼む」と所長自ら、もう一杯あおる。

寒い冬の風物詩。市庁舎前や街の広場のクリスマスマス市。ブンチュ（ホットワイン）を飲みながら聴く野外ステージのバンド演奏。子供たちが、数百年という長い時を経て伝承されたチェコ語のクリスマス・キャロルを歌いながら雪の舞う道を楽しげに歩いてゆく。

街の劇場でオペラを観た帰りに、ジャズを聴きに飲み屋に寄ったり、教会での室内楽コンサートへの帰りにクラブで踊ったりと、彼らの生活は音楽に溢れている。

誰かが楽器を持っていて、いつでも歌があつて、生のバンド演奏がなかったらパーティーが成り立たない。毎日の生活にも、それぞれの季節にも、音楽がある。人生の節目。五十歳のお祝いも生演奏とダンスと歌は欠かせない。

「チェコ人」という誤解

イメージとは恐ろしいもので、チェコと聞くとチェコスロバキア時代の「社会主義」「プラハの春」「革命」と重い歴史の空気を感ずる方も多いと思う。私もこの国で生活するまではその一人だったし、その歴史の重みは否定できない。

しかし、実際のチェコは明るく、チェコ人は陽気だ。

そして、イメージという意味では、チェコ音楽というジャンルそのものの感じ方も、実際に生活をして変わった。それは外国人が日本に「日本らしさ」を求めたように、ドイツ音楽の世界が求めたチ

エコらしさを私もまた「チェコ音楽」として考えていたからだ。当時、スメタナやドボルジャークがそれを求められて書いた音楽と、社会主義体制の国家が見せようとした「チェコらしさ」に、いつのまにか私たちが見たいチェコを重ねていた。そのことで本当のチェコを見失う結果になっていった事に、生活を通して気づくことができたのだ。

新しい時代

考えてみれば、つい二十年前まで閉ざされていた国の真実を伝えるのは容易なことではない。たかさんの音楽家や著名な研究者がチェコの音楽について書いてきた。しかし私はそれらとは全く違ったチェコの音楽文化に出会った。もちろん政治的な転換や、社会的な変化がそれを急速に押し進めたのも事実だが、それだけではなく、今まで私たちがチェコに、「チェコらしさ」を求めていたことも事実だ。インターネットを中心とし

た情報革命は、チェコ内部に止まらず、世界の古い価値観やイメーজから来る幻想の壁を壊しつつあることに、私は大きな期待を寄せている。なぜなら、そうした幻想が消えてこそ、人は初めて偏った先人観なしにチェコ音楽を聴くことができるからだ。そのことで、今までの「チェコらしさ」という幻想の陰に埋もれてしまい知られていないチェコ人作曲家や、チェコ音楽らしくないという理由で低く位置づけられていた彼らの作品が今後、改めて評価されていくだろう。そしてまた、そういった作品を発掘、紹介していくことは私たち研究者のこれからの課題である。

チェコが奏でる音楽

「普通のチェコ人の、普通の生活を知りたい」……思い返せば、私のチェコ生活はこの言葉で始まった。ただ、飾らないチェコの日常の中で、音楽や演劇、劇場や教会、言葉、歴史、その全てを「普通の

生活」の中で体験したかった。

しかし私の希望は日々裏切られた。この国に普通の音楽体験は一度もなく、いつも驚かされた。本で読み、想像していた「チェコらしさ」はどこにもなく、代わりに考えもしなかった喜びがあった。

数百年変わらず愛される街並み。人々を魅了してやまないヴルタヴァ川（モルダウ）の流れは、昔も今も変わらず人を癒している。そして未だに、この土地は力を失うことなく、人を惹きつける。この土地に生まれた音楽も、同じ力に満ちている。流行りの言葉で言うなら、この国は一種のパワースポットなのかもしれない。そう、既存の「チェコらしさ」が仮に消えても、有名なメロディーが消えたとしても、この土地はまた音楽を奏で、チェコの人々は歌い続けるだろう。チェコに赴いたときには是非、知識として知っている「チェコらしさ」を一度忘れて、ヴル

チェコという大地そのものが音楽を奏でているかのように、語りかける、その言葉を聴くことができるだろう。

〈著者紹介〉

出井則太郎（でいのりたろう）
東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。テノール。

オモロウツ、パラツキー大学にてヤロスラフ・マイテネル教授に師事。チェコ国内各地でコンサートに出演する傍ら、教会ではミサ、教会音楽でカウンターテノールとしても活躍。チェコとスロヴァキアの民謡から、クラシック、ポップスまで幅広く東欧の音楽を紹介するコンサートが人気。
チェコ共和国大使館主催・チェコ音楽コンクール実行委員。